

『隨想錄』より抜粹

25 万歳

なむあみだぶつ

ばんざいばんざいばんざい てんじょうてんげ

おお

こうふく

もうねん

南無阿弥陀仏 く 万歳万歳万々歳、天上天下にこんな大きな幸福があるだろうか。妄念

乱動するこの渦巻の儘が如来の一人子とは感謝せずにはおられないではないか。煩惱熾盛のこの儘が、正定不退の真菩薩とは懺悔せずにはおられないではないか。法の尊さを仰げば仰ぐ程機の醜さを知らされ、機の下劣を掘れば掘る程、法の深妙なるを教えられる。御親の五兆の願行を思うにつけても、逆説の屍の洪太さを深謝し、釈尊の八千遍の御苦勞を偲ぶにつけても下根下劣の無能を懺悔し、諸仏の証誠護念を聞くにつけても、背恩忘恩の不甲斐なきに号泣せずにはおられない。仏智満入の今でさえ噴焰怒濤の惡魔じやもの、御親の御胸

を焦がしているではないか。信樂開発の今でさえ我慢我執の盲者じやもの、釈尊の涙の乾く暇がないではないか。正定不退の今でさえ放逸無慚の曲者じやもの、諸仏の苦労は絶えないではないか。この梃子に合わない法龍が、この仕末の悪い法龍が仮智の不思議とは言ないが、地獄遁ただけでも不思議じやに必定の菩薩とは又不思議ではないか。不思議の中の又不思議、鬼が仏に成る不思議!!

底の知れない悪魔の法龍が、精神的大満足を獲て、身命を賭して叫ばずにおれないとは不思議ではないか。高座に登れば快刀で乱麻を截つが如く、水際鮮やかに真仮の分際が手際よく口から出て来るのに、自分がら不思議で堪らない。人に言つて聞かすのではなく、自分の悪性をさらけ出し、これが救われたからお聞きなさい。この逆謗の屍が開発したからお求めなさい。開発しないのは熱心が足りないからだ。満足出来ないのは真剣に成つていないからだ。慶びの出て来ないのは摂取されていないからだ。慶んで来いとは仰らんからと平氣

でいるけれども、真実功德大宝海の仏智が満入していないから慶喜心が湧かないのだ。經典師釈には、慶んで來いと言う要求はないけれども、開発すれば慶べると書いてある。第十八願には信樂、成就の文には信心歡喜、付属の文には踊躍歡喜、聖人様は広大難思の慶心、心身悅豫と仰せられてあるではないか。現在の地獄を知らないから、大千世界に満てらん火をも過ぎ行きての奮進がなく、三定死の境地に立たないから、猛火に包まれてゐる事に驚かないのだ。八つ裂きに逢うても不足の言えない逆謗闡提の機が、地獄を遁れさして戴いただけでも地団太踏んで慶んでも足りないのに、五十二段を超証さして戴く約束が決まって慶べない筈がないのだ。慶べないのは話だけ知つて開発していなかつた。この世の議員に当選してさえも、僅か四年の任期の議員でさえも万歳万歳と有頂天に成つてゐるではないか。無量寿の証を開かして戴くのに何故万歳と言えないのだ。

でも歎異鈔第九節には「慶ぶべき心をおさえて慶ばせざるは煩惱の所為なり」と仰せられ

てあるではないか。あのお言葉は貴殿とは桁が違う。貴殿は、機を見れば底きび悪い、ひよつと墮ちはせぬかの不安があるから喜びが出ないので信前であり、歎異鈔は開発以後信後の懺悔であるから、往生に対する不安や心配は微塵もなく、湧き出る煩惱を見るにつけても、親の御苦労を感謝して「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願はかくの如きわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」と讚えておらるるではないか。信前の行者が信後のお言葉の真似だけして、不安の煙幕を張つて浄土に暴れ込もうとしたつて臨終の閑所が許さないぞ。

現生に十種の利益を蒙る法龍は世の中が思いの儘になるのだ。極悪最下の法龍が今日迄無事に生かされている事が不思議なのだ。病人の多い世の中に一度も大病した事がないではないか。衣食住に困る人の世に何一つとして不自由がないではないか。地位も名譽も財産も法龍には過分なのだ。御客僧、御講師、和上様と尊敬さるる資格が何処にあるのだ。この

心、この身の幸福を思う時、仏様の慈愛、祖先の陰徳を感謝せずにはおられないのだ。家族の死亡に逢い、思わぬ事件に遭遇する時、毒蛇惡龍の悪因の開花なりと懺悔せずにはおられないのだ。して見れば善きにつけては感謝し惡しきにつけては懺悔し、不平もなれば怨恨もない、地上に於ける幸福者、思いの儘になる人生を讃えつつ、使命を果たさずにはおられないのだ。

聖人様は「遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」と仰せられてあるが、俗人から選び出された法龍が無上の功德を具足して、本願や行者・行者や本願のこの慶び、握る世話もいらなければ離す世話もいらぬ。天を拝み地を拝み、山川草木、雨露水土悉くが法龍一人を生かす為ではなかつたか。着ている法衣は粗末でも、み仏の賜物だから応報の妙服の思ひがし、食べている食物は不味くとも、白毫の恩賜と思えば百味の飲食の思ひがし、住んでいる住宅は傾いていても脚延べさして戴く儘が宮殿の思ひがするのではないか。と大満足させてくだ

さるまでの御苦勞はどれだけであつたろう。この鴻恩に報いる為には今日が最後じや、今が最後じやといふ總てを投げ出した活動をせずにはおられないのだ。地上の總ての宝を戴いたよりも、これ程の愉快、満足、歡喜、安心、感謝、慶喜があるだろうか。万歳万歳万々歳と

さけ

おや
あ

いただ

なむあみだぶつ

26 真似では通れぬ

南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏。信に信功なく、行に行功なしと言われてあるように、信じた手柄も間に合わず、称えた力も助けに成らず、ありの儘の凡夫の燃え立つ儘が、南無阿彌陀仏と一体とは不思議ではないか。法を見る儘が機、機を見る儘が法、五兆の願行を

成就して十劫已來呼び通しと聞く時には、如何に難化の法龍か反省され、釈迦往來八千遍の御苦勞を聞くにつけても、惡逆の法龍の渢太さを顧み、十方恒沙の諸仏如來の証誠護念を聞く度毎に、難治の業病の法龍を知らさるるのである。法の鏡に照らし出された逆説の屍が信樂開発さされたとは、無量永劫親様を泣かせた事だろう。自惚れ強い惡性が真心徹到さされたとは、幾度無駄骨折らした事だろう。梃子でも動かぬ生え抜きの実機が無我の境地に立たされたとは、どれだけ心血を注がせた事だろう。

見れば見る程、法の尊さを仰ぎ、聞けば聞く程、惡性の深さを懺悔せずにはおられない。歡喜の言葉も南無阿彌陀仏、懺悔の言葉も南無阿彌陀仏、本願や行者・行者や本願、法龍の儘が南無阿彌陀仏とは不思議の中の不思議ではないか。死後の体失往生も勿論結構には違はないけれども、現生不退の不体失往生は猶更尊いではないか。機法一体、仏凡一体の初起の一念から三業一利も、五念四修も悉く南無阿彌陀仏、乃至一切の身口意の三業は南無

阿弥陀仏と一体に動かなければならぬのだ。然るに惡業の催すは過去の業因の惰力であり、失敗を重ねるは不徳の至りであるけれども、名号の徳には寸毫の変りもないのだ。願力の不思議の鮮やかさに十方法界の功德を全領して、握る世話もいらぬが離す世話もいらぬ、往生に対する心配は微塵もなく報謝の足りない事に呆れるのだ。

まだ足りないくで一生涯努力さして戴くのだ。往生の一段は仏智の不思議で足り過ぎてゐるが、報謝の側は何時も不足ばかりだ。こうまでも安らかな尊い信念があるだろうか、御恵み溢るる大慈悲に感泣せずにはおられない。

一切の道俗よ、信仰は真似では通れないぞ。学問では解決はつかないぞ。会読でも間に合はないぞ。無量永劫流転を続けた逆説の屍が、聞信の一念に心眼を開かして戴いて八万の

法藏を読み破るのだもの、居眠り半分や仁義参りや、子供の守や暇つぶしに参つた位で何の解決がつくものかい。

真宗の道俗は他力じや、唯じや、その儘じやと調子に乗つてゐるけれども、向こうに眺めた他力は槍放しそ。話に聞いてゐる唯は空砲ぞ。合点したその儘は我儘ぞ。

他力他力と言つてゐるけれども、自力の判らない者に、他力の味わえる者は唯の一人つていないので。自力の修行をしたり、自力廻向をしたりしなかつたら、皆自力を興してないよう心得、南無阿弥陀仏に向えば悉く他力のように思ひ込んでゐるけれども、信楽開発しない間は總て自力の執心を離れてはいないので。永年御法義を聴聞しながら、うんともすんとも言わない代物が照らし出され、今度聞いたら判るだろう、今度聞いたら安心がつくだろう、今度、今度と力む心が自力の心なのだ。又聖人様は「定散の自心に迷うて金剛の真信に昏し」と仰せられて、心静かに殊勝な念佛が出れば往生は一定と思い、散乱放逸の時の

念佛は功德がないように心得、功德善根の励める時の念佛は如何にも参れそうなが、反目激論の時の念佛は行けそうにないよう思^{おも}うのが、自分の心の善し悪しで往生を決めかけているのだもの、これが自力でなくて何処に自力があるのだ。その根本の自力の機執が弥陀の利劍に截^きち切れずにいて、枝葉の成り心^なや、戴^{いただ}きぶりに技巧を凝らし、言葉の綾に誤魔化され、はいの返事も向こうから、戴^{いただ}いた信が誠なら往生は一定!!^{まこと}と言^{おうじよう}うて貰^{もら}うと、誠^{まこと}でもな^{まこと}るものまことなつもなむあみだぶつきいろこえねんぶつちょうしと

んでもない者が誠に成つた積りで、南無阿弥陀仏 くと黄色い声の念佛で調子を取つて

有難^{ありがた}がつて、他力の信仰は徹底^{てつてい}した積りでいるのだもの情けないではないか。

ただ い やすが ただ おつしや ただ おも ただ おも

唯じやくと言つてゐるけれども安買いして、唯と仰るから唯と思うてゐるのでも、唯

と書いてあるから唯と知つたのでも往生の間に合わないのだ。唯と言う言葉までも用事のない唯の境地に生かされなければ、真宗の極意を諦得させたとは言えないのだ。人々は上の空で宗教を聞いているが、あれでよいのか。どうなつたのが唯なのか、どう戴いたのが唯か御承知かい。

正信偈の上には、唯と言う字が六回出でているが、歎異鈔の二節目には「親鸞におきてはただ念佛して」とあるから、ただ念佛しさえすればよいと言う簡単な唯ではないぞ。前後を読んで御覽なさい。前は「各々十余か国のさかいを越えて身命を顧みず」尋ねて来たのは、内からは善鸞大士の異議、外からは日蓮上人の攻撃によつて、今まで有難がつていた親株同行が信仰に狂いを生じて、身命を顧みず尋ねて来たのであるが、今の求道者にこの態度があるか。その時聖人様は何と御答え遊ばしたか。後の同行を育てて貰う為に任せた親株同行が、善鸞の言葉でぐらつくのかい、日蓮の批難で狂いを生じたのかい。実地親様に逢うてい

ない証拠ではないか、と言葉には出されないけれども、涙をのみながら、表面だけは優しく、南都北嶺にも立派な学者がおらるるから、訳や理屈が聞きたいのならさつさとお行きなさい、親鸞におきては唯念佛して、と仰せられたのだ。後の文句を読んで御覧なさい、「たとい法然上人にすかされまいらせて地獄に墮ちたりとも更に後悔すべからず候」 「いずれの行も及び難き身なればとも地獄は一定住家ぞかし」と、二十カ年の修行も百夜の祈願も総てが竭きた絶対惡の親鸞が誓願不思議に摄取されて「ただ念佛」せずにはいられなかつたのだと言う時は、八万の法蔵を読み破らされたときの「ただ」なのだ。それを簡単に唯と仰るから、唯とは浅ましい聞き方ではないか。

まま い まま せつきよう き

その儘じやくと言つてゐるけれども、どの儘がその儘なのだ。お説教聞いてゐるその儘か、家庭で火の車のその儘か。どんな心で宗教を聞いてゐるのだ。ぼんやり聞いてゐるの

をその儘のようと思つてはいなか。罪を造りながら、障りを抱えながらと平氣で言つてい
るが、そんな者は刑務所より他に行く処はないぞ。そんな我儘では眞実報土へは入られない
のだ。

真宗でその儘來いと言うのは、善導様の御言葉で言えば、「直ちに來たれ」であるけれども、
「西岸上に人あつて喚んでいわく汝直ちに來たれ」ではないのだ。「一心正念にして直ちに
來たれ」であつて、一心正念をぬきにした直ちに來たれではない。その儘來いよ く と言
えば、調子には乗せやすい、乗り易いけれども、極意を究める事は出来ない。何故ならば「汝
一心正念にして直ちに來たれ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せん事を畏れざれ」
の喚声は、貪瞋煩惱に狂わされて畏れている者にこそ響く喚声であつて、岸上に居眠る者に
伝わる声ではない。今信仰を求める人達が素直な柄じやと自惚れて、居眠り半分に、はいの
返事も向こうから、戴いた信が誠なら、この儘ながらの往生とは・・・・・何と呑氣な

しゅうきょう もあつた者だ。そんな者こそ真宗に害毒を流す身中の虫ではないか。その儘とはどの
宗教もあつた者だ。そんな者こそ真宗に害毒を流す身中の虫ではないか。その儘とはどの
まま 僅か。唯除五逆誹謗正法と捨てられた機が十方衆生の本当の機で、本当に除かれた機がそ
の儘助かるのだ。自分自身にその機が照らし出されなければ、必墮無間と言うも、下下品の
機と言うも、無善造惡と言うも、言うばかりで実感はないのだ。真実除かれた時でなければ
自力の機執は除かれないので。身動きならぬ絶対の悪性の助からないその儘が、五兆の願
行を成就せしめた相手なのだから、唯除五逆と捨てられた機が若不生者の念力で、浮くか
沈むか、迷うか悟るか、往生の得不が正覚の成不の境目なのだ。親と子が生きるか死ぬるか
の最後の極意、墮ちるより他に道がないと往生の望みの綱の切れた時と、お前は墮ちると今
知つたかい、親は五劫思惟の踏み出しから、逆誹の屍と見抜いた上の願行成就ではない
か。助けるに間違いなしの念力の届いた時が、助かるに間違いなしの大決定心、親の願行
が、子の願行に成つた時が、その儘來いよの喚声通りの機にさせて戴いたのではない
が、子の願行に成つた時が、その儘來いよの喚声通りの機にさせて戴いたのではない

して見れば、
他力も、
唯も、その儘も、
言葉だけの真似では通れないぞ。